

令和6年度 第2回多摩区支え合いのまちづくり推進会議 会議録

会議の概要

開催日時		令和7年2月12日（水）13時30分から15時00分まで	
開催場所		多摩区役所 11階 1101～1103 会議室	
出席者の氏名	委 員	一柳宗義（多摩区民生委員児童委員協議会） 大澤敏夫（川崎市多摩区社会福祉協議会） 和秀俊（田園調布学園大学） 岸忠宏（多摩区医師会） 楠静子（多摩区老人クラブ連合会）	坂本顕隆（多摩区町会連合会） 島峯諭（多摩区商店街連合会） 須山祥聖（登戸地域包括支援センター） 眞壁総子（多摩区こども総合支援連携会議）
	多摩区地域包括ケアシステム推進本部幹事会・多摩区支え合いのまちづくり推進会議事務局	佐藤直樹（多摩区長） 林史大（危機管理担当課長） 大塚裕司（総務課長） 相原剛史（企画課長） 上野進（地域振興課長） 柏原美由紀（生涯学習支援課長） 武田泰明（生田出張所地域振興担当係長） 町田昭一（保険年金課担当課長） 大田祈子（児童家庭課長） 小泉朋子（高齢・障害課長） 高橋みゆき（保護第1課長） 瀧澤祐子（保育所等・地域連携担当課長） 岡本幸夫（道路公園センター管理担当課長）	武田克巳（地域みまもり支援センター所長） 浅見政俊（地域みまもり支援センター副所長） 曾我利江（地域支援課長） 永山友里江（地域支援課地域サポート係長） 中山礼子（地域ケア推進課長） 杉本光一郎（地域ケア推進課企画調整係長） 高橋公（地域ケア推進課企画調整係）
	関係者	手塚翔太（健康福祉局地域包括ケア推進室企画調整係長）	
	欠席委員	小川町子（多摩区食生活改善推進員連絡協議会） 小山富士子（多摩区子ども会連合会） 坂本利枝（多摩区地域自立支援協議会）	
議 事		（1）地域包括ケアシステム構築に向けた令和6年度の多摩区の実施の進捗について （2）高齢者のつながりづくりについて	
傍聴人の数		なし	

配付資料	[配布資料] 資料 1 …名簿 資料 2 …地域包括ケアシステム構築に向けた令和 6 年度の主な取組の進捗について 資料 3 …高齢者のつながりづくりについて 参考資料 1 …多摩区支え合いのまちづくり推進会議運営要綱 参考資料 2 …令和 6 年度第 1 回多摩区支え合いのまちづくり推進会議会議録 参考資料 3 …こどもタウンニュースたま区版 [冊子資料] 第 7 期多摩区地域福祉計画 冊子
--------------------	---

議事要旨

発言者	発言要旨
事務局（中山課長）	次第1（開会）
	（会議録作成のため録音の承認）
佐藤区長	次第2（挨拶）
事務局（中山課長）	・配布資料の確認
事務局（中山課長）	次第3（議事）
	進行調整役を和委員にお願いしたい旨提案→承認
和委員	僭越ながら進めさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。 それでは次第に従い議事を進行する。 議事（1）について事務局から説明をお願いします。
事務局（高橋職員）	次第4（議事）
	（1）地域包括ケアシステム構築に向けた令和6年度の多摩区の実施の進捗について
	資料2の説明
和委員	御説明いただいた内容について御質問はあるか。
坂本顕隆委員	資料2の25ページについて、明治大学や専修大学の教授にヒアリングしたとのことだが、どのようなことをヒアリングし内容としてどのような回答が得られたのか教えてほしい。
事務局（高橋職員）	地域づくりに明るい先生に対し地域包括ケアシステムを構築するうえで参考になる話を伺えればという考えからヒアリングを実施した。例えば、明治大学農学部教授には、ゼミの学生が農産物の販売を企画する際に地域の方と関わっていくうえでのポイントについて話を伺った。また、専修大学の教授からは研究成果をはじめとして様々な話を伺った。
坂本顕隆委員	概要は分かったが具体的にどのような内容が話されたのかももう少し説明いただきたい。専修大学とは過去に学生によるボランティア組織が作られたと記憶しているがそのあたりの具体的なことは聞いたのか。
事務局（高橋職員）	ボランティア組織の話は聞いていない。例えば、学生が地域と関わっていくうえでの難しさという観点で、4年で卒業してしまうため個人としてもゼミとしても地域と長期的・継続的に関わっていくことの難しさがある、という話を聞いた。また、こちらからは菅地区で取り組まれているテレビゲームを活用した認知症カフェについて情報提供したところ、出席した教授がぜひ見学したいという話になった。実際はコロナの影響によるカフェの中止により実現できなかったが、双方で情報交換を行った。
和委員	明治大学、専修大学の各先生ともアクティブで学生を連れてよく地域に出ている方なので、学生と地域がどのようにコラボできるかのリアルな話が聞けたのではないかな。インタビューの結果がパブリッシュされることはあるのか。

発言者	発言要旨
事務局（杉本係長）	生田地区の地域づくりの一環で、どのような地域づくりをしているか情報交換・収拾をしてきたというのが実情である。
和委員	議事（２）について 事務局から説明をお願いします。
事務局（杉本係長）	次第４（議事） （２）高齢者のつながりづくりについて
	資料３の説明
和委員	事務局から意見交換をしたいということでトピックが２つ提示された。まずは資料に掲載されている内容について意見や質問から伺いたい。
岸委員	資料３の１１ページについて、幸区のみ他の６区と違って町内会等への加入率が増加しているが、何か理由があるのか、それともたまたまなのか。
和委員	先に私の推測を述べるのでその後行政から説明をお願いしたい。幸区は昔ながらの町内会・自治会が色濃く残っており、人のつながりも近い地域という印象。多摩区や全体と比較するとそのような傾向が影響しているのではと考える。
地域振興課長	私が幸区役所に配属されていた時の話だが、区内に大きいマンションが建つと住民向け説明会に区民課が出向いて、住民票の登録の手続きや町内会の加入について説明していた。町内会・自治会の大切さを直接伝えるという手法が集合住宅向けには成功したのではと考える。また、和委員の発言のとおり昔からの住民が多いため脱退する傾向が少ないのではと考える。逆に、多摩区は学生が多いため町内会等への加入率が上がらないと認識している。
岸委員	幸区はコロナ禍の令和２年度以降増加している。地域のつながりはコロナ禍で減ったと考えられるにも関わらず加入率が増加しているのには何か要因があるのではと思う。要因が分析できればヒントになるのでは思う。
和委員	重要な御指摘だと思う。コロナ禍で加入の必要性を感じたのだろうか。多摩区の減少傾向も含めリサーチしないといけないと思う。 例えば資料３の１３ページの老人クラブのデータに対して、楠委員から御意見をお願いしたい。
楠委員	減っているのは事実である。それに対するケアとして、会員数３０人未満のいわゆるミニクラブの組織に力を入れたり、単位クラブに属さず地区としてまとめて面倒をみるというシステムが動きつつある。幸区とは行事の数字を比較することが多いので、先ほどの加入率の話題は私も関心がある。コロナ禍においては、町会連合会も社協も行事をストップしていたが、老人クラブは演芸大会以外のすべての行事を実施していた。その点では、数字として出てはいないが、健康寿命を延ばす取組に協力できていると考えている。
和委員	事務局から孤立は人のつながりにおいて課題であると示されたが、私の住む飯室谷町会でも老人クラブの楽しそうな写真が回覧板で回ってくる。活動するうえで社会的孤立が増えているという実感はあるか。また、老人クラブで活動するようになって変化が見られたなどの事例はあるか。

発言者	発言要旨
楠委員	私たちの活動は健康・友愛・奉仕の3本の柱に基づいているが、友愛の観点の取組として、民生委員とまでいかないが、外に出られない状態の高齢者宅を訪問して話し相手になる活動をしている。もとは老人クラブに入っている人向けの取組だったが、私の単位クラブでは令和7年度から老人クラブに入っていない人にも対象を広げる予定である。見守りの対象になっているということがかえってプライドを傷つけることのないように関わることが大切だと考えている。また、体を動かすことと人と交流することはとても大事だと実感している。
和委員	全国を回っていると、老人クラブの「老人」という言葉が引かかる人が多いという話をよく耳にする。そこが加入率にも影響しているのかもしれない。いろいろな自治体が名称の工夫をしている。つくば市ではシルバークラブと呼んでいる。
楠委員	市老連では名称を変えていきたいという意見も出ている。
和委員	資料3の14ページに地域包括支援センターへの相談件数のデータがあったが、現状をお聞かせいただきたい。
須山委員	コロナ禍以降、あまり外に出てはいけないという意識が染みついて閉じこもる高齢者が多く、足腰が弱っての転倒といったハイリスクになった状態での相談が増えた。また、区内のかかりつけ医からの助言により相談件数が増えたと認識している。ケアマネージャーが1人で40件のケアプランを作成する一方、地域包括支援センターは1人50件のケアプランを作成している状況にあり、フリー相談や地域活動への対応が加わってくるとやりきれなくなっている現状にある。「何かあれば包括へ」という周知をさせていただいていることは助かっているが、少ない人員でのフリー相談の対応に日々追われている。
和委員	専門職だけでの対応の限界はある。地域の方々と連携していくことも重要かと思うがいかがか。
須山委員	区内7か所の地域包括支援センターが、主任ケアマネージャー、社会福祉士、看護師という3職種で区内のすべての高齢者に対応しきことは不可能である。民間の方々による見守りの体制と連携したり、他の機関に振らせていただかないと限界があると認識している。
和委員	都内で暮らす私の母が自宅近くのコンビニで店員さんとよく会話しており、良き相談相手や居場所になっているようだ。資料2の37ページの地域見守りネットワーク事業はコンビニとの連携はあるのか。
事務局（杉本係長）	セブンイレブンとは連携している。
和委員	福祉に力を入れているコンビニ他社があることも有名である。日常で多くの方が相談しやすく居場所にもなる民間との連携は必要であると考えます。スターバックスカフェが認知症カフェや子育てサロンの時間を設けるなど相当いろいろやっている。登戸駅にも開店したので仕掛けていけたらいい。 専門職や民間でもカバーしきれない部分で重要になってくるのが民生委員児童委員だが、一柳委員から御意見をいただきたい。

発言者	発言要旨
一柳委員	資料3の17ページの高齢者生活状況調査について、コロナ禍以前は民生委員が対面で調査していたが、コロナ禍以降は郵送で調査を行い返答のない方の自宅を民生委員が訪問するという調査方法に変わった。民生委員は3年で任期満了を迎え改選となるが、2期6年間にわたり高齢者と接触していない委員もいる。民生委員の負担軽減につながった反面、対面だと把握できていた実情が見えなくなった。民生委員が自分の受け持つ地域でどなたを見守るべきかを認識するうえでは、訪問調査が大切ではないかと思う。 資料3の10ページの身近な相談相手として、民生委員は0.47%という結果だが、次回調査では0%に近づくのではという危惧がある。 中野島地区では高齢男性の集まりの場である「さんさん会」を開催している。高齢男性に限定した理由は、閉じこもりが多く孤独にもつながるためケアの必要性を感じたため。当初は75歳以上の単身男性を対象としていたが、現在は家族がいても参加してもらえる形をとっている。保育園児との交流を企画した際はどの方にも喜ばれた。
和委員	全国を回って話を聞くと、誰が民生委員なのかを地域の方が知らないというのが一番のネックだと感じる。私も男性の定年退職後の孤立をテーマに研究しているが、さんさん会の取組は素晴らしいと思う。 子どもとの交流が素晴らしいのだという意見があったが、高齢者と子どもとの交流は多いものなのか、眞壁委員に伺いたい。
眞壁委員	私が運営する団体では、高齢者と深く交流を行うイベントはしていないが、地域イベントではバルーンアートができる高齢の方に協力いただいたことがある。川崎市の地域の寺子屋事業も受託しているが、高齢者に寺子屋先生として参加してもらい特技を子どもの前で披露してもらうなどの交流を持っている。そういった高齢者は自分から外に出ていける方々だが、閉じこもっている高齢者に私たちからお声がけをするというのは難しいと思う。菅地区では保育園児が公園体操に赴くという事例もあるが、公園体操に参加する高齢者は元気で自分から行動できる方だと思う。 これは子育て中のお母さんにも同じことが言えると思う。地域の子育て支援センターまで出てきてくれるようなお母さんは、何かがあったときにどこかで相談につながるが、シニアの方と同様、家に閉じこもっているお母さんをどうやって探し出せばいいのだろうという課題がある。これまで仕事でキャリアを積んでいた女性がお母さんになった時に地域に知り合いがないという状況が生じるが、まさに男性の定年退職後の孤立と重なる。 コロナ禍もそうだが、昨今のプライバシー意識の強まりや不審者、強盗など事案を考えると、家庭の事情を聞くだけで疑念を持たれるなど声をかけづらい世の中になっていると思う。
一柳委員	中野島地区社協の取組として、年末に高齢者に向けて年賀状を出している。中野島中学校の生徒に内容を書いてもらい、宛名は後で社協が書いている。
和委員	高齢になればなるほど年賀状による人とのつながりが重要になるという研究も

発言者	発言要旨
	ある。コロナ禍で地域活動が止まった時、大阪の豊中市の社協が年賀状の取組を実施して好評だったことから全国に広まった。 いろいろな活動をされている大澤委員から御意見をお願いしたい。
大澤委員	菅地区社協では年賀状に加えて暑中見舞いの送付も行っている。地区内の5つほどの小学校の4年生に内容を書いてもらっている。話は戻るが、社協に老人福祉部という部門があったが高齢者福祉部に名称を変えた。 1月31日に地域生活支援 SOS かわさき事業のネットワーク会議が開催された。社協の会員であるいろいろな施設の方43人に出席いただき、困りごとの共有や連携に向けた意見交換を行った。小さな子どもから高齢者までこの町に住んでよかったと思ってもらえるような様々な取組に今後も取り組んでいきたい。
和委員	ネットワーク会議は地域包括ケアシステムの構築に不可欠な会議体だと思う。 活動できる人もそうだが活動場所の問題もあると思う。商店街連合会をはじめとする民間のお店の活用可能性について島峯委員に伺いたい。
島峯委員	私の経営するコンビニで最近万引きの被害が発生したが、万引きをした人が認知症の疑いがある地域の高齢者だった。1日に1200～1300人来店するが、いろいろな方が地域にいて感じた。私は以前民生委員を務めていたが、当時の経験から、多少嫌がられても訪問して様子を確認するというのは大事だと思った。
和委員	認知症の方であることをお店側が把握して見守っていくことも重要だと思うがすでに取り組んでいることはあるか。
島峯委員	商店街の商店同士が地域に住む人の変化を緩く共有することはある。
和委員	大澤委員のおっしゃった大きな会議体のネットワークも重要だが、日常の社会資源の範囲でのネットワークも必要だと思う。
楠委員	老人クラブでも認知症サポーター養成講座で勉強することがあるが、子どもに認知症のことを理解してもらう取組はとてもいいと感じた。
和委員	商店街では認知症サポーター養成講座は行っているのか。
島峯委員	特に行っていないが、商店街のメンバー自体が高齢化しているので、それぞれ自分事として向き合っている。
和委員	坂本委員から御意見をお願いしたい。
坂本顕隆委員	多摩区はこども文化センターと老人いこいの家が合築されている施設がいくつかあるが、こども文化センターがイベントを行う時に高齢者を招待したり講師として招いたりすることがあり、子どもと高齢者が交流する機会が多々ある。 中年の引きこもりの方が身近にいらっしゃるが、回覧板を回して戻ってくことで安否を確認するという状況がある。町会の役員会でその方をどうするか話し合うがなかなか決め手がない。健康問題があれば保健師が訪問するなどの切り口があるだろうが現状どうにもできない。 町会の今年の新年会で女子会などのLINEグループを作ることになったが、このことをきっかけに一人暮らしのメンバーの自宅でお茶会をするといった新たな取組が生まれた。

発言者	発言要旨
和委員	LINE の活用を巡る課題はどこでもあると思う。私の町会でも会長が LINE で役員同士のやりとりしたいという提案をしたことがあるが、一人でも乗り気ではないとそこでストップしてしまい進まない。
坂本顕隆委員	以前、川崎プロボノ部に応募して町会での LINE の活用について実践を試みたが、全員の賛成を得られず実現できていない。
和委員	今年 2025 年は団塊の世代が 75 歳以上になる。資料 3 の 22 ページで団塊の世代の特徴について触れていたが、このような特徴を持った世代の方と地域でどのように関わっていくかを考えることは、社会的な孤立を予防しながら誰もが安心して生活し続けられる地域にするうえで重要だと思う。 進行を事務局にお返しする。
事務局（中山課長）	和委員、議事の進行ありがとうございました。委員の皆様もいろいろな御意見をいただきありがとうございました。閉会にあたり、地域みまもり支援センター所長の武田から御挨拶を申し上げる。
武田所長	幸区の状況について確認して何らかの形でフィードバックさせていただきたいと考えている。また、幸区の取組のうち参考になることは多摩区でも取り入れてまいりたいと思う。本日はどうもありがとうございました。
事務局（中山課長）	以上をもちまして令和 6 年度第 2 回支え合いのまちづくり推進会議を閉会いたします。本日はどうもありがとうございました。